

# 蔵訳『阿闍世王経』第Ⅰ章前半部分訳注研究

宮 崎 展 昌

## はじめに

本稿は、2017年より訳者が公表している蔵訳『阿闍世王経』の訳注研究に連なるものであり、本稿では第Ⅰ章前半部分を扱う。<sup>(1)</sup>

すでに先行する訳注研究でも述べてきたように、〈阿闍世王経〉(\**Ajātaśatru-kaukrtya(prati)vinodana*)は、父王を殺害した阿闍世王(\**Ajātaśatru*)がその後悔の念(\**kaukrtya*)を解消する(\**vinodana*)という物語を軸とする、初期大乘經典である。その主要な物語が展開するのは第Ⅴ章以降であるが、典籍の冒頭を飾る第Ⅰ章では、阿闍世王は登場せずに、文殊と25名の菩薩、4名の天子が、「一切智者の智」(\**sarvajñajñāna*)や「(一切智者の)大いなる智」(\**mahājñāna*)をどのようにして獲得するのか、などに関して、各自意見を順に述べていく。その形式は、有名な〈維摩経〉の「入不二法門品」(*Advayadharmamukhapraveśa parivarta*)において、文殊や維摩ら諸菩薩がそれぞれ、「不二の法門に入ること」について見解を述べていくというスタイルと類似し、他の大乘經典にも相似する形式が共有される。<sup>(2)</sup>

本経第Ⅰ章では、菩薩や天子それぞれの発言内容は、その固有名と関連している場合もあれば、そうでない場合もあって一様ではない。それぞれの発言の長短については、最初の菩薩数名は比較的簡潔であり、後に発言する菩薩や天子らはやや長い傾向は見られるものの、それらの傾向も一定していない。ただし、最後に発言する文殊の発言が最も長いのは明らかである。

本稿では、17番目に登場するサーガラマティ(海慧)菩薩(第21節)までを扱う。残りの後半部分第22節以降については、2020年3月に刊行予定の『大

谷大学真宗総合研究所紀要』第 37 号に掲載される予定である。

## 訳注の方針

本稿でも、前稿までの方針を基本的に踏襲するが、一部改めた部分もあるので再掲する。

前稿同様、本稿でも〈阿闍世王經〉の蔵訳テキストからの現代語訳を提示する。依拠する蔵訳テキストは筆者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本<sup>(3)</sup>とし、用いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同經の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定することを試みる。以下、その他の点について箇条書きで記す。

- ・〔分節〕訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所では節に区切り、適当な見出しを付ける。
- ・〔想定梵語〕原則的にアステリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、*Mahāvīyūtpatti* から想定可能なものは訳文中の括弧内に想定サンスクリット語を記すのみとする。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠もあわせて注記する。
- ・〔固有名〕紙数の関係から、本稿では想定サンスクリット語からのカタカナ表記は初出時に示すのみとし、繰り返される場合は相当する漢訳語を借用するか一般に知られる漢訳の固有名を用いることにする。
- ・相当する現存漢訳諸本、特に支識訳および竺法護訳と蔵訳との間に注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも 9 世紀頃に成立した蔵訳本に比べてかなり古く、系統を異にすると思われる上記両漢訳は、同經のより古い姿を探る上で貴重であり、それらの異同を詳細に調査し、記すことは極めて重要である。

## 略号および使用テキスト

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan ed., K.P. Jayaswal Research Institute, 1967.

- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, F. Edgerton ed., 1953. (Reprint: Rinsen Book, 1985)
- KP *Kāśyapaparivarta*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya ed., *The Kāśyapaparivarta: Romanized Text and Facsimiles*, International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2002.
- LCTSD Lokesh Chandra ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1959–1961 (Reprint: Kyoto, 1976)
- MVy *Mahāvvyutpatti*, 榊亮三郎編著『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』1916–1925. (Reprint: 国書刊行会, 1981)
- Negi Negi, J. S. ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1993–2005.
- Pa. Pali
- PTSD *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, T.W. Rhys Davids and William Stede eds., 1921–1925.
- T. 大正新脩大藏經
- VkN *Vimalakīrtinirdeśa*, 大正大学綜合佛教研究所梵語佛典研究会編『梵文維摩經一ポタラ宮所藏写本に基づく校訂』大正大学出版会, 2006.
- 『赤沼固有』 赤沼智善編『印度佛教固有名詞辭典』破塵閣書房, 1931. (復刊: 法藏館, 1967)

#### 蔵訳〈阿闍世王經〉<sup>(4)</sup> 諸本

- |     |                    |  |
|-----|--------------------|--|
| A   | タボ(Tabo)寺写本        | No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45, 47, 50–51, 53, 61, 61–75, 77–79b2. |
| B   | ベルリン写本             | No. 224: mdo sde, Tsha 275b5–343a2.  |
| Ba  | バスゴ(Basgo)写本       | No.49.2: mdo, Nga 76a2–160b4.  |
| Bth | バタン(Bathang)写本     | No. 57: Pa 150a6–199b1.  |
| D   | デルゲ版               | No. 216: mdo sde, Tsha 211b2–268b7.  |
| G   | ゴンドラ(Gondhla)写本    | No. 26,01: Ka1b-51a5.  |
| He  | ヘーミス(Hemis) 写本(I)  | No. 48.1: mdo, Nga 133–157a6. (第X章の途中より)                                     |
| Hi  | ヘーミス(Hemis) 写本(II) | mdo, Nga 77–81, 91–92, 95, 100, 114–118, 148–152a1.                          |
| J   | ジャンサタン(リタン)版       | No. 159: mdo sde, Tsha 234b2–295a6.  |
| L   | ロンドン写本             | No. 166: mdo sde, Za 273a7–354a6.  |
| N   | ナルタン版              | No. 201: mdo sde, Ma 339a4–427b6.  |
| P   | 大谷北京版              | No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5–281a5.                                    |
| Ph  | プクタク(Phug brag)写本  | No. 289: mdo sde, Ke 1b1–85b3.   |
| S   | トク宮(Stog Palace)写本 | No. 223: mdo sde, Za 266b7–351a7.  |
| T   | 東京写本               | No. 223: mdo sde, Za 247a8–321a8.  |
| U   | ウランバートル写本          | No. 272: mdo sde, Za 237b4–312b8.  |

〈阿闍世王經〉漢訳諸本

- 【識】 支婁迦讖訳『阿闍世王經』（大正新修大藏經 No. 626）  
【護】 竺法護訳『普超三昧經』（大正新修大藏經 No. 627）  
【天】 法天訳『未曾有正法經』（大正新修大藏經 No. 628）  
【放】 失訳『放鉢經』（大正新修大藏經 No. 629）

参考文献

- Bongard-Levin, G., Boucher, D., Fukita, T. and Wille, K. [1996] “The *Nagaropamasūtra*: An Apotropaic Text from the *Samyuktāgama*. A Transliteration, Reconstruction, and Translation of the Central Asian Sanskrit Manuscripts,” *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Lfg. 6, pp. 11–96.
- Boucher, Daniel [1996] *Buddhist Translation Procedures in Third-Century China: A Study of Dharmarakṣa and his Translation Idiom*, Ph.D thesis, the University of Pennsylvania.
- Brough, John [1950] “Thus have I heard ...,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (BSOAS), Vol. XIII, pp. 416–426.
- Harrison, Paul [1990] *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present*, International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.
- Nattier, Jan [2003] *A Few Good Men: the Bodhisattva Path according to the Inquiry of Ugra Ugraparipṛcchā*, University of Hawai'i Press, Honolulu.
- Pāsādika, von Bhikku [1989] *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya: A Critical Edition of the mDo kun las btus pa*, Akademisk Forlag i Kommission, København.
- Silk, Jonathan [1989] “A Note on the Opening Formula of Buddhist Sūtras,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 12, pp. 158–163.
- Tola F. and Dragonetti C. [1999] “Ekam Samayam,” *Indo-Iranian Journal*, Vol. 42, pp. 53–55.
- 岡本嘉之 [1997] 「仏典冒頭の慣用句再考」『印度学仏教学研究』46-1, pp. 164–171.
- 辛嶋静志 [1993] 「法華經における乗 (yāna) と智慧 (jñāna) —大乘仏教における yāna 概念の起源について」, 田賀龍彦編『法華經の受容と展開』（法華經研究 12）, pp. 1371–197.
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさと一仏と文殊の空のおしえ』人文書院, 東京.
- 下田正弘 [1993] 『藏文和訳『大乘涅槃經』（I）』山喜房佛書林, 東京.
- 長尾雅人・桜部建訳 [2003] 『宝積部經典』（大乘仏典 9）中公文庫, 東京.
- 船山 徹 [2007] 「「如是我聞」か「如是我聞一時」か—六朝隋唐の「如是我聞」解釈史への新視角」『法鼓仏学学報』1号, pp. 241–275.
- [2019] 『六朝隋唐仏教展開史』法藏館, 京都.
- 星 泉 [2016] 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京.
- 宮崎展昌 [2012] 『阿闍世王經の研究—その編纂過程の解明を中心として』山喜房佛書林, 東京.
- [2016] “Highly Effective Practices in the *Sahā* World: Similar Accounts Found in

- Four “Mañjuśrī Sūtras” and Other Mahāyāna Sūtras,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 64-3, pp. 1171-1177.
- [2017] 「蔵訳『阿闍世王経』第II章訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第34号, pp. 77-97.
- [2018a] 「蔵訳『阿闍世王経』第IV章訳注研究」『大谷学報』97-2, pp. 83-103.
- [2018b] 「蔵訳『阿闍世王経』第XI章前半部分訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第35号, pp. 163-183.
- [2019] 「蔵訳『阿闍世王経』第III章前半部分訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第36号, pp. 103-122.
- [forthcoming] 「蔵訳『阿闍世王経』第I章後半部分訳注研究」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第37号（掲載予定）
- 村上真完校註 [1994] 「阿闍世王経」『阿闍世王経・文殊師利問経他』（新国訳大藏経9「文殊経典部」1）, pp. 36-89, 249-350.
- 渡辺章悟 [1981] 「〈対告衆としての Satpuruṣa〉」『東洋大学大学院紀要』18号, pp. 92-79.
- [2019] 「Satpuruṣa 考」『東洋思想文化』6号, pp. 168-143.

（本研究はJSPS科研費JP16K16694の助成を受けたものである。）

## 【蔵訳『阿闍世王経』第Ⅰ章前半部分訳注研究】

### 第Ⅰ章 一切智の獲得をめぐる文殊と菩薩、天子たちの見解

#### §1 世尊とその会衆<sup>(5)</sup>

次のように私はある時間<sup>(6)</sup>いた。<sup>(7)</sup>〔ある時、〕世尊は王舎城の靈鷲山<sup>(8)</sup>において、<sup>(9)</sup>1250人の比丘からなる大比丘サンガと、種々の仏国土よりやって来た八万四千の菩薩と、菩薩・大士で、神通力をそなえ、<sup>(10)</sup>ダーラニー（\*dhāraṇī）を獲得したものであり、無碍なる辨才（\*pratibhāna）をそなえ、<sup>(11)</sup>無生法忍を獲得したものであり、三昧（\*samādhi）とダーラニーを成就したものであり、理解しつつ巧みなものであり、一切衆生の心の意向が信ずるように教えを説く〔菩薩〕たち、および四天王（\*caturmahārāja）と諸天の王たるシャクラ（\*Śakra-devendra）と、サハー世界の主たるブラフマー（\*Sahāmpatiḥ Brahmā）と、それ以外のデーヴァらとナーガ、<sup>(12)</sup>ヤクシャ、<sup>(13)</sup>ガンダルバ、<sup>(14)</sup>アスラ、<sup>(15)</sup>ガルダ、<sup>(16)</sup>キンナラ、<sup>(17)</sup>マホーラガといった幾百のものたちと共に<sup>(18)</sup>おられた。

#### §2 文殊と25名の菩薩<sup>(18)</sup>

またその時、マンジュシュリー・クマラーブータ（文殊師利法王子）<sup>(19)</sup>はある山の段（\*pariṣaṇḍa）の一面において、25名の善士と共にいた。<sup>(20)</sup>すなわち、①ナーガシュリー菩薩、②ナーガダッタ〔菩薩〕、③シュリーサンバヴァ〔菩薩〕、④シュリーガルバ〔菩薩〕、⑤パドモッタラシュリー〔菩薩〕、⑥パドマシュリーサンバヴァ〔菩薩〕、⑦ジャガティーンダラ〔菩薩〕、⑧ダラニーインダラ〔菩薩〕、⑨ラトナパーニ〔菩薩〕、⑩ラトナムドラーハスタ〔菩薩〕、⑪シンハマティ〔菩薩〕、⑫シンハガティガルジタスヴァラ〔菩薩〕、⑬ガガナガンジャ〔菩薩〕、⑭サハチットトパーダダルマチャクラプラヴァルティン〔菩薩〕、⑮サルヴァパダプラベダプラティバーナ〔菩薩〕、⑯プラティバーナクータ〔菩薩〕、⑰サーガラマティ〔菩薩〕、⑱マハーメール〔菩薩〕、⑲プリヤダグシャナ〔菩薩〕、⑳プラームードヤラージャ〔菩薩〕、㉑アナントダグシャナ〔菩薩〕、㉒アナントラーンバナヴィハーラ〔菩薩〕、㉓マードリシュティサ

ムドガタ〔菩薩〕, ②④アショーカダッタ〔菩薩〕, ②⑤サルヴァールタシッダ〔菩薩〕<sup>(23)</sup>といった, 菩薩・大士である彼ら 25 名の善士と一緒に〔文殊は〕居た。

### §3 4名の天子

兜率天のデーヴァプトラ<sup>(24)</sup> 4 名も法を聞くために, 文殊師利法王子に<sup>(25)</sup> 随行していた。すなわち, ①サマンタクスマという天子と, ②ラシュミクスマという天子と, ③マNDERラヴァクスマガンダという天子と, ④サドードユクタダルマヴィハーラという天子, および他の多くの天子もまた,<sup>(26)</sup> 法を聞くために文殊師利法王子に随行していた。

### §4 菩薩ら会衆の発問<sup>(27)</sup>

そこで, 彼ら善士たちと彼ら天子たちは集まり, 着座してから, 時に,

「おお, 友らよ, 仏の智 (\*buddhajñāna) は広大であり, 無量であり (\*aprimeya), 量られず (\*apramāṇa), 不可思議であり (\*acintya), 匹敵するものはなく (\*asama), 並ぶものもなく (\*atulya), 考えも及ばず, 無比のもの (\*asamasama), 無上なるもの (\*anuttara) である。すなわち, それ (= 仏の智) は, 正しき鎧 (\*saṃnāha) を持てるものでないものにはさとることができないならば, どのような鎧を着れば, 一切智者の智である大いなる智<sup>(28)</sup>をさとることができるのか」

そのような話をするとき,

### §5 ナーガシュリー菩薩<sup>(29)</sup>

① ナーガシュリー菩薩は<sup>(30)</sup>言った。

「善根 (\*kuśalamūla) として積み重ねられたものを振り向けることに満足せず (\*atṛptā) に, 善根に励むことに住しつつ, 忘失しない (\*asampramoṣa) という鎧を着るものがその大いなる智をさとることができる」

## §6 ナーガダッタ菩薩

- ② ナーガダッタ菩薩<sup>(33)</sup>は言った。

「平等心 (\*samacitta) と穏やかな心 (\*damacitta), 柔軟な心, まっすぐな心 (\*pragunacitta), 穏和な心, 高貴な心を持つが故に, 一切智者の智への堅固な取り組み (\*dṛḍhasamādāna) の核に住するという鎧を着るものが, 一切智者の智であるところのその大いなる智をさとることができる」

## §7 シュリーサンバヴァ菩薩

- ③ シュリーサンバヴァ菩薩<sup>(35)</sup>は言った。

「おお友らよ, 量ることのできるカルパのあいだにその大いなる智をさとることはできないけれども, 量ることのできないカルパ (\*aprameyakalpa) のあいだ鎧を着るものが, その一切智者の智をさとることができる<sup>(36)</sup>」

## §8 シュリーガルバ菩薩

- ④ シュリーガルバ菩薩<sup>(37)</sup>は言った。

「善男子よ, 自分の安楽へ執着しつつ住する菩薩は, その大いなる智をさとることはできないけれども, 自らの安楽に対して無執着をそなえる〔菩薩〕は, その一切智者の智をさとることができる。すなわち, 欲のないひとに対して見返りはなされるべきものではないというところの<sup>(39)</sup>, その安楽はあらゆる衆生に対して与えられる, として, あらゆる衆生が安楽であり, 安楽をそなえたものにしておくようになすところのそのものは, その一切智者の智をさとることができる<sup>(40)</sup>」

## §9 パドモッタラシュリー菩薩

- ⑤ パドモッタラシュリー菩薩<sup>(41)</sup>は言った。

「『自己が制御されず, 守護されず, 清められていないそのものによって, 制御されず, 守護されず, 清められていない他人が制御され, 鎮められるというその状況は存在しないけれども, 自己がよく制御され, よく守護さ



れ、よく清められたそのものによって、制御されず、守護されず、清められていない他人が制御されて、鎮められるその状況は存在する』と、世尊もまたそのようにおっしゃる<sup>(42)</sup>。すなわち、それゆえ、〔自己が〕制御されて、シャマタ (\*śamatha) という実践に入りつつ、他人を制御し、シャマタに適せしめることに巧みであるものが、その大いなる智慧をさとることができる」

## § 10 パドマシュリーサンバヴァ菩薩

⑥ パドマシュリーサンバヴァ菩薩<sup>(43)</sup>は言った。

「おお友らよ。世間法と結びついたものが世間を超越することはできないけれども、世間法と結びついていないところのそのものは世間を超越するであろう。それゆえ、菩薩は、利得・不利得、名誉・不名誉、賞賛・非難、安楽・苦痛によって（心は）奪われず、菩薩・大士であって、高慢ではなく (\*anunnatā)、卑屈でないそのものが、その大いなる智慧をさとやすい」

## § 11 ジャガティーンダラ菩薩

⑦ ジャガティーンダラ菩薩<sup>(45)</sup>は言った。

「おお友らよ、他人に対して過失を追及するもの (\*upālabhāprekṣiṇī) は、一切智者のその大いなる智慧をさとることはできないけれども、『2 人ではなくひとり<sup>(46)</sup>で、あらゆる衆生のために大いなる鎧を自ら着ることによって、あらゆる衆生の何とかして達成されるべきであるところの、そのすべては自らによって達成されるべきである』として、善根が植えられて、あらゆる衆生が熟せしめられるべきであるので、そのものはあらゆる衆生とともに発心する。すなわち、一刹那のあいだも精進を捨てずに、そのように精進に住する菩薩は、その大いなる智をさとることができる」

## § 12 ダラニーンダラ菩薩

⑧ ダラニーンダラ菩薩<sup>(48)</sup>は言った。

「おお友らよ、例えば、地は、草 (\*yavasa/\*tṛṇa) と茂み (\*gulma), 薬草 (\*bhaisajya), 森林 (\*vana) <sup>(49)</sup>すべてのものにとっての住処である。すなわち、そこ (=地) に住しつつ、草と茂み、薬草、森林の、あらゆる種 <sup>(50)</sup>(\*bīja) が生じるであろうけれども、その大地は見返りを望むこともない。あらゆる衆生もまた大地より生かされるが、大地は厭うことさえもない。善男子よ、まさにそのように菩薩は貪りと怒りの心を離れ、あらゆる衆生にとっての癒すものであり、見返りを望むことがないものであるので、地と同様に、  
発心すれば、[その菩薩] その大いなる智をさとることができる」<sup>(50)</sup>

### § 13 ラトナパーニ菩薩

⑨ ラトナパーニ菩薩 <sup>(51)</sup>は言った。

「おお友らよ、知るべし。これは大いなる鎧である。すなわち、劣ったものを信じているものがその大いなる智をさとることはできない。けれども、睡眠 (\*supta) での夢 (\*svapna) <sup>(52)</sup>においてさえも、二乗へ心向けず<sup>(53)</sup>に、宝である心、すなわち、一切智者のその心を他の人々もが望むようにせしめながら、宝であるその心について惜しむこと (\*mātsarya) <sup>(54)</sup>はなさないが、すべての衆生もまた大乘というその鎧をまとうことをなしつつ、その並ぶことのなき心もまた満たされることも減退することも見られず、その様に惜しむことのない心を持つものはその大いなる智をさとることができる」

### § 14 ラトナムドラーハスタ菩薩

⑩ ラトナムドラーハスタ菩薩 <sup>(55)</sup>は言った。

「おお、これらの衆生は六趣に落ちるので、それぞれにむけて大悲 (\*mahā-karuṇā) <sup>(56)</sup>が発せられる。すなわち、あらゆる衆生に対して、法印であるところの3つの宝印によって印づけられることが与えられるべきである。すなわち、寡聞 (\*alpaśruta) <sup>(57)</sup>である衆生たちには、聞くという手が与えられるべきである。吝嗇なる (\*mātsarya) <sup>(58)</sup>衆生たちには、喜捨という手が与えられるべきである。悪しき習慣 <sup>(59)</sup>をそなえた衆生たちには、良き習慣 (戒)

という手が与えられるべきである。害意（\*vyāpāda）を持つ衆生たちには、忍耐という手が与えられるべきである。怠惰な（\*kausīdaya/\*ālasya）衆生たちには、精進という手が与えられるべきである。記憶力の衰えた（\*smṛtīhāṇi）衆生たちには、禪定を得るという手が与えられるべきである。劣った智慧を持った衆生たちには、智慧という手が与えられるべきである。すなわち、それぞれの正しい法から離れたところの衆生たちが、まさにそれぞれの法を円満にするために手が与えられるべきである。

すなわち、その菩薩の善根という手もまた3種の宝印によって植えられべきである。3種とは何かというと、すなわち、あらゆる衆生が仏の智を円満にするような廻向という宝印によって植えられるべきであること、自らの善根を成就するという宝印によって植えられるべきであること、あらゆる衆生は虚空を本性とする宝印によって植えられるべきであること〔という3種である〕。すなわち、善男子よ、その様な住処にとどまるものは、一切智者のその大いなる智をさとることができる」

## § 15 シンハマティ菩薩

⑪ シンハマティ菩薩<sup>(61)</sup>は言った。

「おお友らよ、これは畏れないこと（\*vaiśāradya）という鎧である。これは怯えないことという鎧である。これは慄かないことという鎧である。これは怠けないことという鎧である。<sup>(62)</sup>

おお友らよ、それゆえ、不畏と、怯えない心、慄かない心、怠けることがないこと、畏れ慄きて毛を逆立てることから離れること、輪廻の罪過を生まないこと、涅槃の功德を正しく観察すること、安楽と苦しみの法に等しく住すること、不二にとどまること〔といったこれらの事柄を〕をそなえたものが、一切智者〔性〕を悟りやすい」

## § 16 シンハガティガルジタスヴァラ菩薩

⑫ 菩薩シンハガティガルジタスヴァラ<sup>(65)</sup>は言った。

「おお友らよ、その歩みは劣った人物の〔歩み〕ではないが、それは善士<sup>(66)</sup>の歩みである。それはどうしてかという、(1) 善士たちは誤った見解を離れることによって、正しいことに働きかけるものである。(2) 善士たちは常に真っ直ぐな自性をそなえていることによって、狡猾さ(\*sāthya)のないものである。(3) 善士たちは師に仕えることによって、傲慢さ(\*māna)を減しているものである。(4) 善士たちは指示されたならば柔順に受け取ることによって、優れた言葉をそなえるものである。(5) 善士たちは正しい生き方(\*samyagājīva)に住していることによって、名声ある行為(業)を持ったものである。(6) 善士たちは倦怠(\*udvega)を離れることによって、貪りを離れるものである。(7) 善士たちは忿怒(\*pratigha)を離れたことによって、怒り(\*dveṣa)を離れたものである。(8) 善士たちは落ち着いて(\*śānta), 心を静めて(praśānta), 寂静である(upaśānta)<sup>(68)</sup>ことによって、真っ暗な暗質を離れたものである。(9) 善士たちは苦しみと貧しさをもった人に対して哀れむことによって、柔和なものたちである。(10) 善士たちは身体と言動、意思(身口意)の清浄なる行為(業)によって、謙虚さ(\*lajjā)をそなえるものである。(11) 善士たちは、それらのなすべきことを正しく行うことによって、言われたままになすものである。(12) 善士たちは常に堅固に努めることによって、優れた意向(\*adhyāśaya)をそなえるものである。(13) 善士たちはあやまった法より離れることによって、真実に住するものである。(14) 善士たちは法の喜びによって歓喜し、悦ぶことによって、法を希求するものである。(15) 善士たちは身体と命を捨てることによって、正法を理解するものである。(16) 善士たちはあらゆる衆生とともにいることによって、〔彼らを〕見捨てないものである。(17) 善士たちは勝義(\*paramārtha)に随順することによって、罪過を見るものである。(18) 善士たちは悪しき法を断つことによって、正法に入るものである。(19) 善士たちは貧しき人たちにとっての蔵(\*nidhi)である。(20) 善士たちは病人(\*vyādhi)たちにとっての医者(\*vaidya)である。(21) 善士たちは恐れを抱いた人たちにとっての

保護者 (\*nātha) である。(22) 善士たちは保護 (\*parāyaṇa) のない人たちにとっての拠り所 (\*śaraṇa)<sup>(70)</sup> である。(23) 善士たちは輪廻の海に入った人たちにとっての住处である。<sup>(71)</sup>(24) 善士たちは拠り所 (\*āśraya) のない人たちにとっての拠り所である。<sup>(72)</sup>(25) 善士たちは真っ暗な闇に入った人たちにとっての照らすことをなすものである。<sup>(73)</sup>(26) 善士たちは悪しき道に入った人たちにとっての導師 (\*nāyaka) である。(27) 善士たちは説法者 (\*dharmabhāṇaka) たちにとっての導師 (\*pariṇāyaka) である。(28) 善士たちは忍耐と柔和さというヨーガをそなえることによって、悪しき罪過や害意、害悪を隠すこと、怒りといった、あらゆる激情から離れるものである。それゆえ、善士たちは、以上のようなあり方(法)に留まることによって、彼の大きい智をさとることができる」

## § 17 ガガナガンジャ菩薩

⑬ ガガナガンジャ菩薩<sup>(74)</sup>は言った。

「虚空が無量であるように、慈しみ (\*maitrī) の修習というヨーガをそなえ、大悲 (\*mahākaruṇā) に住して相續を断たず、感官は常に喜びつつ (\*mudita) 微笑み、あらゆる性的な欲望<sup>(75)</sup>については無関心なもの (\*upekṣā) として捨てて、虚空と等しい布施をそなえ、虚空と等しい良き習慣 (戒) をそなえ、<sup>(76)</sup>虚空と等しい忍辱をそなえ、虚空と等しい精進をそなえ、虚空と等しい三昧をそなえ、虚空と等しい智慧をそなたものが、<sup>(77)</sup>一切智者〔性〕をさとることができる」

## § 18 サハチットーパーダダルマチャクラプラヴァルティン菩薩

⑭ サハチットーパーダダルマチャクラプラヴァルティン菩薩<sup>(78)</sup>は言った。

「発心<sup>(79)</sup>してすぐにマーラ (魔) によって機会が獲得されて、如来はお喜びにならず、デーヴァ (天) は歓喜せず、自らの良き部分が減退するであろうような、それらの発心は菩薩が起すべきではない。一方、発心してすぐに魔によって機会が獲得されず、如来はお喜びになり、天は歓喜し、自

らの良き部分が減退することのないであろうような、それら発心は、〔菩薩が〕起こすべきである。すなわち、そのもの（＝菩薩）がそのように行動するならば、発心してまもなく法輪を転ずるであろう。<sup>(81)</sup>それはどうしてかという、そのようにその菩薩が発心してまもなく、原因と根拠の縁（\*hetu-ālabana-pratyaya）は生じないが故に、一切法は生じず、如来のさと<sup>(82)</sup>りもまた生じないことから理解するであろう一方で、まさにさとりのように、法輪を転じることにもまた同様であると知るべきである。すなわち、心の意向という鎧をそなえた彼らは一切智者〔性〕をさとることができる」

## § 19 サルヴァパダプラバーダプラティバーナ菩薩

⑮ サルヴァパダプラバーダプラティバーナ菩薩<sup>(83)</sup>は言った。

「善士らよ、さとりはすべてをともしなうものである。すなわち、煩惱をともしなうものであり、清浄であること（\*vyavadhāna）をともしなうものであり、有為をともしなうものであり、無為をともしなうものであり、有漏をともしなうものであり、無漏をともしなうものであり、罪あること（\*sāvadya）をともしなうものであり、罪のないことをともしなうものであり、善根をともしなうものであり、不善根をともしなうものであり、世間法をともしなうものであり、出世間法をともしなうものであり、輪廻をともしなうものであり、涅槃をともしなうものであり、無常と常住をともしなうものであり、蘊と界と処をともしなうものである。

すなわち、善士らよ、さとりは地、水、火、風、虚空をともしなうものである。<sup>(84)</sup>それはどうしてかという、一切法は次のようなものを自性とする。すなわち、自性は空そのものである。それら〔一切法〕は、それぞれの言葉によって説かれるそのあらゆる区別は空に他ならない、ということを説くことをなす。すなわち、たとえば、虚空界（\*ākāśadhātu）はすべてをともしなう。まさにそのように、さとりもまたすべてをともしなう。すなわち、善士らよ、菩薩であって、その様な智を信ずるものは、すべての対象に関する辨才を獲得しつつ、そのもの（菩薩）はすべての語句の区別〔に關

る〕<sup>(85)</sup> 智をも獲得するであろう。すなわち、ひとつの語句に対して働きかけるそのもの（菩薩）が一切智者〔性〕をさとり」

## § 20 プラティバーナクータ菩薩

⑩ プラティバーナクータ<sup>(86)</sup>菩薩は言った。

「おお友らよ、語られることすべては不可説である（\*anabhilāpya）。すなわち、すべての音声は語られない。その智を信ずる菩薩は動揺することのない心をもつものである。すなわち、優しく説くこと（\*priyavādita）と悪<sup>ざま</sup>し様に説くことに対して歓喜し、恐れることがない。

すなわち、例えば、メール山において風が生じて再び戻ってくるならば、メール山は動揺することもなく、揺れ動くこともない。善男子よ、まさにその様に、同様の智を得た菩薩は、すべての音声と話すことによく耐える。すなわち、動揺せず、全く揺れ動かず、他の外道（\*tīrthaka）のいかなる言葉にも執着しないだろうし、如来のお言葉と外道の言葉も等しい法に他ならないとみて、平等性にも背くことをなさず、すべての外道のあらゆる辨才もまた滅する法と見て、滅する法としての法に対して傲慢にもならない。すなわち、善士らよ、その様な智を信ずる菩薩は素早く一切智者〔性〕を生じるであろう」

## § 21 サーガラマティ菩薩

⑪ サーガラマティ<sup>(87)</sup>菩薩は言った。

「善士らよ、菩薩は聞いたことすべてを保持するので、海の如き意に心が向かうことを理解するべきである。法性<sup>(88)</sup>において違いがないので、そのもの（菩薩）は一味なる法を希求すべきである。縁起<sup>(89)</sup>（\*pratītyasamutpāda）とは矛盾しないので、そのもの（菩薩）は法性について認識すべきである。無始以来生じないので、いかなる法も減退せず、増大しないはずである。福德<sup>(90)</sup>（\*puṇyā）は尽きないので、あらゆる衆生を利益する善根<sup>りやく</sup>が植えられるべきである。滅することと常なることより離れているので、そのもの（菩薩）

は両極端を弁別すべきである。心の修習（\*bhāvanā）が無量であるので、そのもの（菩薩）は一切法について認識すべきである。〔その菩薩は〕法を忘れないので、自らの記憶力が生じることも確立するべきである。すべての衆生に対して平等に法を説くので、そのもの（菩薩）はすべての傲慢さを正しく滅し、完全になくすべきである。仏の不共なる法（\*aṇṇikabuddhadharma）は最上であるので、あらゆる不善の法とは結びつくべきではない。善士らよ、憶念することの智というその鎧〔をそなえたもの〕が一切智者〔性〕をさとることができる」

## 註

- (1) 既発の訳注研究でも注記したように、諸先学の御批正を仰ぐために、〈阿闍世王經〉の各部分について蔵訳からの訳注研究を試みに提示してきた。このようなかたちで訳注研究を公表するのは、この第Ⅰ章でひとまず最後とし、既発のものと博士論文に収めた第Ⅴ章～第Ⅹ章の同経主要部分の訳注研究を合わせ、残余の部分を加えた同経全体の蔵訳から訳注研究を次年度以降に一冊にまとめて出版する予定である。可能であれば、同経の蔵訳本批判校訂版と諸訳対照本もあわせて公表したい。
- (2) 具体的には、例えば、〈文殊師利仏土莊嚴經〉（T. Nos. 310 (15), 318, 319; D No. 54）の後半部分（T. No. 310 (15), 11.349a 以下）では「一相法門」に関して、また、〈思益梵天所門經〉（T. Nos. 585, 586, 587; D No. 160）では鳩摩羅什訳「談論品」（T. No. 586, 15.48b 以下）に相当する箇所において「菩薩」に関して、複数の登場人物がそれぞれの見解を述べる事例が確認できる。
- (3) 現時点では、後出の略号表に掲げる 16 種の資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王經〉の批判校訂本を準備している。校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本カングュルを底本としている。
- (4) チベット大蔵經カングュル諸本の〈阿闍世王經〉の情報については、ウィーン大学 Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies に置かれたプロジェクト The Tibetan Manuscripts Project Vienna (TMPV) が作成したデータベース The Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs; <https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php> : 2019 年 9 月 25 日確認) を利用した。
- (5) 【護】「正士品第一」、定方 [1989: 9]「第 1 節 仏の集会」
- (6) *'di skad bdag kyis thos pa dus gcig na: \*evaṃ māyā śrutaṃ ekasmin samaye*. 大乗經典冒頭に広く共有される定型句 *evaṃ māyā śrutaṃ ekasmin samaye* については先行研究のなかで議論されてきた。すなわち、*ekasmin samaye*「ある時」が後続する部分を修飾するのか、それとも「私は聞いた」を修飾するのか、というものであるが、ここでは、Paul Harrison 氏らが提案する、前後双方を修飾するという解釈を採用する。



上記定型句に関する主要な先行研究を掲げておくと、Brough [1950], Silk [1989], Harrison [1990: 5 n. 3], 下田 [1993: 23], 岡本 [1997] などがある。漢訳における「如是我聞一時」については、詳細な議論がなされているものに船山 [2007] (船山 [2019] に一部文言を改めるかたちで再収録) がある。その他の先行研究については Bongard-Levin [1996: 90 n. 1], Tola and Dragonetti [1999] を参照のこと。

- (7) *rgyal po'i khab*: \*Rājagṛha (MVy 4107) 【識】「羅閼祇」【護】「王舍城」【天】「王舍城」
- (8) *ri bya rgod kyi phung po*: \*Gṛdhrakūṭaparvata (MVy 4115) 【識】「耆闍崛山」【護】「靈鷲山」【天】「鷲峯山」
- (9) *brgya phrag phyed dang bcu gsum*: この蔵訳文を直訳すると「半百 (= 50) と 13」となるが、ここでは \*ardhatrayodaśaśatāni を誤解して訳出してしまったものと見ておく。仏典で頻繁に見かけられる、比丘衆の数である \*ardhatrayodaśaśatāni (1250) は、MVy によれば、蔵訳では通常, *stong nyis rgyas lnga bcu* あるいは *stong nyis brgyas lnga bcu* (MVy 6264) と訳出するようだが、ここでは *ardha* を *śatāni* に掛け、*trayodaśa* を別に訳出してしまったようである。
- ちなみに、漢訳諸本では、【識】「萬二千比丘」【護】「比丘三萬二千」【天】「萬二千五百人」とする。

- (10) *mngon par shes pa mngo par shes pa*: \*abhijñābhijñāta. BHSD p. 51 参照。
- (11) *mi skye ba'i chos la bzod pa*: \*anupattikadharmakṣānti (LCTSD 1786)
- (12) *gnod sbyin*: \*yakṣa (MVy 3218) 【識】「閼叉」【護】「神」【天】「夜叉」
- (13) *dri za*: \*gandharva (MVy 3219) 【識】「捷陀羅」【護】「健沓和」【天】「乾闥婆」
- (14) *lha ma yin*: \*asura (MVy 3220) 【識】「阿須輪」【護】「阿須倫」【天】「阿修羅」
- (15) *nam mkha' lding*: \*garuḍa (MVy 3222) 【識】「迦留羅」【護】「加留羅」【天】「迦樓羅」
- (16) *mi'am ci*: \*kṛmṇara (MVy 3223) 【識】「真陀羅」【護】「真陀羅」【天】「緊那羅」
- (17) *lto' phye chen po*: \*mahoraga (MVy 3224) 【識】「摩休勒」【護】「摩休勒」【天】「摩睺羅伽」
- (18) 定方 [1989: 11] 「第2節 文殊師利の集会」
- (19) *'jams dpal gzhon nur gyur pa*: \*Mañjuśrī kumārabhūta. 「文殊」(Mañjuśrī) とともに頻繁に用いられる *kumārabhūta* に関しては、拙訳 [2017: 83 注8] でも触れたように、大西 [2004] に詳しい。ここでは先行する拙訳同様、「法王子」という漢訳語を借用する。
- (20) ① *skyes bu dam pa*: \*satpuruṣa (MVy 7358) 【識】「上人」【護】「善人」【天】「大菩薩衆」

② *satpuruṣa* については、『法華經』等での「十六善士」にみるように、在家者を指す場合もあるが、この箇所での \**satpuruṣa* は以下に列挙される 25 名の菩薩を指し、*bodhisattva* とほぼ同義の意味で用いられていると考えられる。渡辺 [1981] は、対告衆としての *satpuruṣa* について論じる中で、主要な大乘經典中の *satpuruṣa* についても検討し、「以上指摘した主な大乘仏典中では、各々の立場からその最も強調

すべきポイントに関して、規範者、仏の代弁者、大乘の喧伝者たる役割を *satpuruṣa* に付与せしめており、菩薩中でもその地位は高いようである」と結論している。そして、本経で登場する 25 名の *satpuruṣa* もまた同様の役割を担っていると考えられることができる。すなわち、文殊とともに、25 名の *satpuruṣa* と 4 名の天子たちは順に「一切智者の智をどのようにしてさとるか」ということに関して、それぞれの立場から考えを述べてゆく。なお、渡辺〔2019〕では、初期經典および部派文献、大乘經典における *satpuruṣa* の概念や用法の変遷について詳細に検討している。

- (21) 以下、25 名の菩薩の固有名称については、菩薩それぞれが発言する各節での注記を参照。また、便宜的に番号を振るが、これらは蔵訳には含まれない。
- (22) 【識】では㊶プラーモドヤラージャ、㊶アナンタダルシヤナがこの箇所では入れ替わっている。ただし、後続の箇所では他訳と同じ順番で出てくる。
- (23) 蔵訳のいずれの資料でも、この箇所に *dang* 「～と」という接続詞が入るが、ここでは「菩薩・大士」と「善士」は同格で結ばれるべきところであるので、ここではそのように訳出する。
- (24) *dga' ldan gyi ris kyi lha'i bu*: \**tusitanikāyāḥ devaputrāḥ*. 【識】「兜術天子」【護】「兜率天上有四天子」【天】「兜率天子」
- (25) 天子の固有名については、天子それぞれが発言する各節の注記を参照。また、ここでも便宜的に番号を振るが、これらは蔵訳には含まれない。
- (26) 【識】では「復有異天子少少」と造り、他訳とは対応しない。
- (27) 定方〔1989: 14〕「第 3 節 仏の知恵をいかに獲得するか」
- (28) *thams cad mkhyen pa'i ye shes ye shes chen po*: \**sarvajñāṇāmahājñāna*. 【識】「無極智慧乃至仏一切智不可議」【護】「大乘仏乗諸通慧乗不可思乗斯応道」【天】「阿耨多羅三藐三菩提」

通常「乗」は、\**yāna* に対応する訳語と考えられるが、Boucher〔1996: 197〕でも既に指摘されているように、蔵訳や他の漢訳および前後の文脈から、この箇所の【護】での「乗」はおそらく、\**jñāna* であったと推測できる。\**jñāna* と \**yāna* の混淆については辛嶋〔1993〕参照。

- (29) 本節以降、「大いなる智」「一切智者の智」あるいは「一切智者〔性〕」をどのようにして獲得すべきかについて、菩薩 25 名が各々回答する。菩薩らの教説は、それぞれの固有名に関連した内容になっていることがしばしば見られる（特に㊶ジャガティーンダラ菩薩以降）。また、諸本間で想定される名称が異なる場合には、諸本それぞれでみられる名称に沿った教説が展開されている場合もある（例えば、第 18 番目に登場する「マハーメール菩薩」の一節（本訳注研究には含まれず、後半部分に相当する宮崎〔forthcoming〕の冒頭部分）では【識】のみ固有名が異なり、それに合わせた教説内容になっている）。

各節で登場する菩薩の固有名については、諸本にみられるものを注記する。特に【識】では、§2-3 で列挙される音写語と各節の冒頭で掲げられる意識語の 2 種を掲げる。ただし、【識】がもとづいたところの原本の言語はどうやらガンダーラ語と推定されるが、同語に対する訳者の能力的な限界もあり、【識】の音写語からそ

の原語を想定することは控える。一方、【識】の意識語からサンスクリット語形の想定をしておくことは、他本と比較する上で有効であろうから、可能であれば意識語からの想定梵語は試みに提示する。他典籍における各菩薩の用例についても可能な限り言及する。

- (30) *klu dpal*: \*Nāgaśrī 【識】「若那師利」「慧首菩薩」(\*Jñānaśrī) 【護】「竜首菩薩」【天】「竜吉祥菩薩摩訶薩」 \*Nāgaśrī については、玄奘訳『大般若波羅蜜多經』「第八那伽室利分」(T. No. 220 (8)) およびその異訳『仏説濡首菩薩無上清浄分衛經』(T. No. 234) では主要登場人物として登場し、文殊に対する請問者の一人としての重要な役割を演じている。ただし、\*Nāgaśrī の他の用例については未詳。

一方、【識】より想定される、\*Jñānaśrī については、*Gaṇḍavyūha* 冒頭における会衆の菩薩の一人として名を連ねている (BHSD s.v. 参照)。『兜沙經』(T. No. 280) とその異本 (T. Nos. 281, 282)、および『六十華嚴』と『八十華嚴』においても、\*Jñānaśrī に相当する「惹那師利」「若那師利」「智首」といった菩薩名がみえ、文殊に質問を投げかける重要な役割を果たしている。

- (31) *tshogs bsags pa*: \*sambhṛta (Negi 4926)
- (32) *gzhol par*: ここでは BaBth にみられる *gzhol* (努力する、勤しむ、没頭する) という読みを取る。Ph をのぞいた他本に共通する *gzhog* (削る、傷つける) では意味が通じない。
- (33) *klus byin*: \*Nāgadatta. 【識】「那羅達」「恵施菩薩」(\*Jñānadatta) 【護】「龍施菩薩」【天】「龍授菩薩摩訶薩」 \*Nāgadatta については『龍施女經』(T. Nos. 557, 558) でその前生が語られることが知られる。比丘名としては *Samyutta Nikāya* IX.7 *Nāgadattasutta* に登場する (『赤沼固有』s.v. 参照)。また、BHSD s.v. によれば、*Lalitavistara* では過去仏の名としても出てくる。一方、【識】の意識語「恵施」より予想される、\*Jñānadatta については他例未詳。
- (34) *sems cang shes pa*: \*ājāneyacitta (MVy 1080, 4769 etc.) ājāneya に関しては、BHSD p. 90a ājānya の項で詳説されている。漢訳諸本での対応する訳語は、やや解釈を含んでいるようにみえる。【識】「自隨其教」【護】「其意而心仁厚」【天】「無分別心」
- (35) *dpal 'byung*: \*Śrīsaṃbhava. 【識】「師利三波」「具足平等菩薩」【護】「首具菩薩」【天】「吉祥生菩薩摩訶薩」 \*Śrīsaṃbhava については、*Gaṇḍavyūha* で如来名として登場する (BHSD s.v. 参照)。
- (36) 【識】と【天】ではそれぞれ、【識】「於僧那不自貢高」(鎧に関して高慢にならない)、【天】「為諸衆生難行苦行不自貢高」(衆生達のために難行、苦行をなすが、高慢にならない) というフレーズが最後に挿入される。すなわち、両訳とも無量カルパのあいだ鎧を着てもそれに慢心しないことが含意されている。一方、【護】では前半部分で「趣其大乘」という語が見え、注 25 で述べたように、他訳との対応からこの箇所の「大乘」も \*mahājñāna に相当するものであった可能性が高い。
- (37) *dpal gyi snying po*: \*Śrīgarbha (MVy 666) 【識】「師利劫」「具足行菩薩」【護】「首蔵菩薩」【天】「吉祥蔵菩薩摩訶薩」 \*Śrīgarbha は、BHSD s.v. にあるように、*Daśabhūmika* 〈十地經〉や *Gaṇḍavyūha* 〈入法界品〉、*Saddharmapuṇḍarīka* 〈法華

經)においてみられるほかは、VkN Ch. VIII §27 などにも確認できる。ちなみに、  
 〈華嚴經〉では、Padmaśrīgarbha のように、後分を \*śrīgarbha とする菩薩名が複数  
 確認できる。

- (38) *rigs kyi bu*: \*kulaputra. 諸先行研究が指摘するように、kulaputra は出家者に対する  
 在家者を指す場合もあるが、Nattier [2003: 212] が提言するように、ここでの  
 \*kulaputra は単に菩薩への「呼びかけの言葉」としてみることができる。英語では  
 “gentlemen”, 日本語では「諸子」「諸君」などに相当するだろうか。ただし、ここ  
 では仏典であることも考慮して、漢訳仏典で広く用いられている「善男子」を借用  
 する。
- (39) *lan du bya ba ma yin pa'i*: この箇所は難解である。lan に関しては種々の意味が考  
 えられるが【識】「不求復」を参考にして、「見返り」「報償」という意味に解する。
- (40) *gzhaq par byed pa*: ここでは Bth のみにみられる *gzhaq* (jog の完了形) という読  
 みをとる。一方、他の蔵訳諸本資料の多くで確認できる *gzhog* もまた jog の完了形  
 とされるが、『蔵漢』(p. 907ff) によれば、その場合「剥く」「切開する」を意味す  
 るので、ここでは適切ではない。
- (41) *pad ma bla ma'i dpal*: \*Padmottaraśrī. 【識】「波頭師利」「蓮華具足菩薩」【護】「蓮首  
 菩薩」(\*Padmaśrī) 【天】「最上蓮華吉祥菩薩」(\*Padmottaraśrī) 【護】から推測され  
 る \*Padmaśrī は、*Saddharmapuṇḍarīka* 〈法華經〉Ch. XXIII Gadgadasvara-parivarta に  
 登場し、ガドガダスヴァラ仏の前生について尋ねる請問者の菩薩名として知られる。  
 BHSD s.v. 参照。
- 一方、蔵訳と【天】から推測される \*Padmottaraśrī は、BHSD s.v. によれば、  
*Mahāvastu* や *Lalitavistara*, パーリ文献などにみられる過去仏の名称として知られ、  
*Gaṇḍavyūha* などでは菩薩名としても登場する。
- (42) 【識】では、本節でのこままでの文言が世尊の言葉であることを明示されていな  
 いと同時に、他訳と比較してかなり簡潔な表現である。また、漢訳諸本ではすべて  
 ここで記述が終わり、蔵訳にみられる「すなわち〜巧みであるものが」の部分は他  
 訳には見られない。
- (43) *pad ma dpal 'byung*: \*Padmaśrīsambhava. 【識】「波頭師利劫」「蓮華具行劫菩薩」  
 【護】「蓮首蔵菩薩」(\*Padmaśrīgarbha) 【天】「蓮華吉祥生菩薩」【護】から推測さ  
 れる、\*Padmaśrīgarbha は『観世音菩薩授記經』(T. No. 371) およびその異訳『如幻  
 三摩地無量印法門經』(T. No. 372) において、經全体にわたって仏に対する請問者  
 として登場する。また、注 34 でも指摘したように、後分を \*śrīgarbha とするこの  
 菩薩もまた *Gaṇḍavyūha*, *Daśabhūmika* の冒頭に登場する (BHSD s.v. 参照)。蔵訳と  
 【天】より推測される、\*Padmaśrīsambhava については他例未詳。
- (44) *'jig rten kyi chos*: \*lokadharma. 【識】「欲」【護】「世法」【天】「世間法」後続箇所  
 でも列挙されるように、「世間法」は通常八法を数え、lābha, alābha, yaśas (Pa.  
 yayas), ayaśas (Pa. ayasas), nindā, praśamsā (Pa. pasamsā), sukha, duḥkha である。MVy  
 2341-2348, PTSD 587b, BHSD 464a, AKBh p. 199 など参照。
- (45) *skye bo 'dzin*: \*Jagatīmdhara. 【識】「闍因陀楼」「制持諸根菩薩」【護】「持人菩薩」

【天】「持世菩薩」 蔵訳 *skye bo* より \**jagatī* と推測することは難しいものの、MVy 728 では \**Jagatīmdhara* が菩薩の名号のひとつとしても挙げられているので、ここでは \**Jagatīmdhara* と推測しておく。*Jagatīmdhara* は〈持世経〉(T. Nos. 481, 482; D No. 174)において、仏に対する請問者として登場することが知られる。次節で発言する \**Dharaṇīmdhara* とともに登場することが多く、例えば、*Rāṣṭapālāpariprcchā* や *Ratnaketuparivarta* などが具体例として挙げられる。

- (46) *gcig pu gnyis su med pa la* 「2人ではなくひとりで」 この箇所はやや難解であるが、【識】【護】では以下のように造り、ほぼ同じような意味である。

【識】「当独而無有伴」(ただひとりで伴侶がいまいと思うべきである)

【護】「吾独一己而無有侶」(私はただひとりでだけで伴侶がいまい)

蔵訳の *gnyis su med pa* に関しては、MVy 1717 によれば、\**advaya* に対応すると思われる、「二つとないこと」「ただひとつの」「不二」という意味になるが、ここでは上記の漢訳二本を参考に「2人でなく」と訳出する。

- (47) *yongs su thob bar bya ba*: \**pariprāpayitavya* (Negi 5952) \**pariprāpayati* に関しては BHSD 327b 参照。

- (48) *sa 'dzin*: \**Dharaṇīmdhara* (Negi 7033) 【識】「陀羅尼陀楼」「持行如地菩薩」【護】「持地菩薩」【天】「持地菩薩摩訶薩」 \**Dharaṇīmdhara* は菩薩あるいは *satpuruṣa* の名前として、*Saddharmapuṇḍarīka* や *Rāṣṭapālāpariprcchā* などに見られる (BHSD s.v. 参照)。なお、本節以降、各節に登場する菩薩の固有名と教説内容は何らかの関連性があるように見える。

- (49) 【識】はここで「舍宅、城郭」をも挙げる。

- (50) 本節同様、大地があらゆる衆生を養っているながら見返りを望まないという譬喩を用いて、菩薩のあるべき姿を説くものに、KP §29 が知られる。下田 [1993: 170 (29)] 参照。

*tadyathā kāśyapa iyaṃ mahāprthivī sarvasatvopajīvyā nirvikārā niṣpratikārā. evam eva kāśyapa prathamacittotpādiko bodhisatvo yāvad bodhimaṇḍaṇīśadanā tāvat sarvasatvopajīvyo nirvikāro niṣpratikāro bhavati. tatredam ucyate.*

*prthivī yathā sarvajjanopajīvyā pratikāra nākāṃkṣati nirvikārā.*

*citte tathādye sthita bodhisatvo yāvan na buddho bhavitā jinottama.*

*anuttarā sarvajjanopajīvyo pratikāra nākāṃkṣati nirvikāro.*

*putre ca śatrumhi ca tulyamānaso paryeṣate nitya varāgrabodhim*\*2 (KP p. 18)

「たとえば、カーシャパよ、この大地は衆生の生の糧の根源であり、変化することなく、報酬を求めることもない。それと同じように、はじめて菩提への心をおこした(発菩提心)菩薩は、菩提の座(菩提道場)にすわるまでのそのあいだ、衆生の生の糧の根源であり、(危害を加えられても、心が)変化することなく、(人に利益を与えても、その)報酬を求めることもない。そのことについて、つぎ(の詩頌)がある。

たとえば、大地はすべての生けるものの生の糧の根源であり、変化しないものであり、報酬を期待することがない。それと同じように、はじめて(菩提

への) 心を得た菩薩は、この上ない最高の勝利者である仏陀になる以前のそのあいだ、

すべての生けるものの生の糧の根源となり、変化することもなく、報酬を求めることもない。彼(菩薩)は、(わが)子に対しても怨敵に対しても、等しい心のある者であり、常に最善、最高の菩提を探し求める」(長尾・桜部 [2003: 39-40])

- (51) *lag na rin chen*: \*Ratnapāṇi (MVy 655) 【識】「羅陀波尼」「宝願菩薩」(\*Ratnapraṇidhāna) 【護】「宝掌菩薩」【天】「宝手菩薩」菩薩名として比較的広くみられる \*Ratnapāṇi は、*Saddharmapuṇḍarīka* をはじめ、VkN, 〈文殊師利仏土莊嚴經〉(T. Nos. 310 (15), 318, 319; D No. 59) 〈如来藏經〉(T. Nos. 666, 667; D No. 258) 〈思益梵天所門經〉(T. Nos. 585, 586, 587; D No. 160) 〈虚空藏經〉(T. Nos. 397 (8), 404; D No. 148) などにも現れる。それらの典籍の多くでは、次節の \*Ratnamudrāhastā と併記される。
- (52) *theg pa gnyis la sems mi 'jug cing* 「二乗へ心向けず」  
以下のように、漢訳諸本では、具体的には「二乗」の内容について言及する。  
【識】「於夢中亦無二心。所以者何? 無羅漢, 辟支佛意」  
【護】「若於夢中不志二乘: 聲聞, 緣覺」  
【天】「無聲聞, 緣覺之意」
- (53) 【識】において、大正藏および高麗藏再雕本などでは「不離菩薩, 若不失一切人心」とする箇所については、藏訳の対応箇所であるこの部分「一切智者のその心」や【護】の対応箇所「諸通慧 (\*sarvajñā(-jñāna)) 心」を参考にして、江南諸藏がとる「不離薩芸若~」に改める。
- (54) 【識】では、この箇所に他本とは対応しない特有の記述が確認できる。  
「所以者何? 無心與心等者, 無心慧與是心慧等者, 亦無所增無所減」(すなわち、無心と心は等しく、無心慧と心慧は等しく、増やされることもなく、減らされることもない)
- (55) *lag na rin chen phyag rgya*: \*Ratnamudrāhastā (MVy 656) 【識】「羅陀牟訶多」「宝印手菩薩」【護】「宝印手菩薩」【天】「宝印手菩薩摩訶薩」 \*Ratnamudrāhastā は、注 48 で述べたように、前節で登場した \*Ratnapāṇi と共に言及されることが多い。VkN Ch. VIII §29 でも、本節同様、Ratnamudrāhastā が発言する場面があるが、その発言内容と本節の関連はみられない。
- (56) 【識】では「視五道生死人譬如墮海」と造る。同訳では「六道」の代わりに「五道」が説かれるようである。
- (57) 【識】では「無點者作點首」と造るが、「點」は通常 jñā/jñāna 等に相当する。また、この箇所の「聞くこと」という項目の直前の箇所で、【護】「其無信者為造信手」, 【天】「是諸衆生無信者令生正信」というように、それぞれ「信」に関する項目が確認できる。また、【識】では後続の 6 項目とも共通した特徴として、他訳では「手」であるところが「首」とする。
- (58) *gtong ba*: \*tyāga (MVy 1153) 【識】「無所惜」【護】「恵施」(\*dāna) 【天】「布施」(\*dāna) 【護】【天】では後続の 5 項目とあわせると、いわゆる「六波羅蜜」に相



当する。

- (59) *ngang tshul ngan pa*: \*duhśīla (Negi 932)
- (60) 蔵訳のこの箇所での「あらゆる衆生」は、【識】【護】それぞれでは「一切諸法」「一切法」が対応する。
- (61) *seng ge'i blo gros*: \*Simhamati. 【識】「私訶末」「師子意菩薩」【護】「師子意菩薩」【天】「師子意菩薩摩訶薩」 BHSD s.v. にあるように、\*Simhamati は *Lager Sukhāvativyūha* や〈般舟三昧經〉(T. Nos. 416, 418; D No. 133) などでは過去仏の名称としてみられる。菩薩名としては〈悲華經〉(T. Nos. 157, 158)『大宝積經』『優波離會』(T. Nos. 310 (24), 325; D No. 68)『同』『宝髻菩薩會』(T. No. 310 (47); D No. 91)等に確認できる。また、Vkn Ch. VIII §10 でも菩薩として登場して、有漏と無漏に関する教説を説く。
- (62) 【護】では、本節のここまでの項目をまとめて「斯則仏慧」とする。
- (63) *skyi bung zhes byed pa*: *skyi bung*: \*romaharṣa および *skyi bung zhes byas pa*: \*āhrṣṭaromakūpa (Negi 197) をもとに、試みに「畏れ慄きて毛を逆立てること」と訳出する。
- (64) 蔵訳での「涅槃の功德」云々という記述については漢訳諸本とは対応しないようである。ただし、漢訳諸本間でも【天】は他本とは対応しない。
- 【識】「不作於泥洹」（涅槃をなさない）
- 【護】「不希仰泥洹之徳」（涅槃の功德を望まない）
- 【天】「能出離趣証涅槃」（出離して涅槃におもむくことができる）
- (65) *seng ge'i gros bsgrags dbyangs*: \*Simhagatigarjitasvara. 【識】「師訶維迦闍俱羅」「師子歩過無懼菩薩」(\*Simhavikrāntābhaya) 【護】「師子歩雷音菩薩」(\*Simhavikrāntagarjitasvara) 【天】「師子無畏音菩薩摩訶薩」(\*Simhābhayaḥṣa)
- 蔵訳より想定可能な、\*Simhagatigarjitasvara については、管見の限り、他例未詳。一方、漢訳諸本にみられる漢訳語のいくつかについては、以下のように、類似する訳語が他の漢訳典籍にも確認できる。それらにもとづくとなれば \*Simhavikrāntābhigarjitasvara と想定できるだろうか。
- ・『文殊師利仏土嚴浄經』(T. No. 318, 11.895c)「師子歩雷音菩薩」(= 【護】の訳語と同一)；\*Mañjuśrībuddhakṣetraguṇavyūha (D No. 59, 281b5): *seng ge'i rtsal gyis mngon par bsgrags pa'i sgra*: \*Simhavikrāntābhigarjitasvara
  - ・『聖善住意天子所問經』(T. No. 341, 12.115c)「師子遊歩雷音菩薩」；\*Susthimamatidevaputrāparipṛcchā (D No. 80, 235b1) : *seng ge ltar rnam par gnon pas mngon par bsgrags pa'i nga ro*: \*Simhavikrāntābhigarjitasvara
- (66) 以下、蔵訳では善士 (\*satpuruṣa) のありかたに関して 28 項目の叙述を行う。漢訳諸本のうち、【護】のみが各項目の区切りが明確であり、24 項目を数える。他の漢訳 2 本は項目の切れ目が明確ではないが、訳者が試みに区切ったところ、【識】では 18 項目、【天】では 29 項目を数える。諸訳間での対応関係が不明なものをそれぞれ含む。
- (67) 本項目は蔵訳に特有の項目であり、漢訳諸本には対応するものはみられない。

- (68) *mun pa mun nag*: \**tamondhakāra* (LCTSD 1831)
- (69) 本項目は蔵訳に特有の項目であり、漢訳諸本には対応するものはみられない。
- (70) 【識】では、本項目に対応するものを欠く。
- (71) 【護】では、本項目に対応するものを欠く。
- (72) 本項目は蔵訳に特有の項目であり、漢訳諸本には対応するものはみられない。
- (73) 【護】では、本項目に対応するものを欠く。
- (74) *nam mkha'i mdzod*: \**Gaganagaṇja* (MVy 700) 【識】「加那迦闍」「紫磨金色菩薩」【護】「虚空蔵菩薩」【天】「虚空蔵菩薩摩訶薩」 蔵訳やその他の漢訳より推測される \**Gaganagaṇja* については、〈虚空蔵菩薩所問經〉(T. Nos. 397 (8), 404; D No. 148) で活躍する菩薩として広く知られ、*Lalitavistara* や *VkN* などに確認できる。BHSD s.v. 参照。
- (75) *'dod pa'i dga'*: \**kāmarati* (LCTSD 1267)
- (76) 本節のここまでの部分については、蔵訳ではいわゆる「四無量心」(*catvāry apramāṇi*) について説いているようにみえる。一方、漢訳諸本では4項目は明確ではなく、「四無量心」が意図されていなかった可能性が考えられる。具体的には、【識】では *maitrī* と *upekṣā* に関する記述がなく、【護】および【天】では *upekṣā* に関する記述は確認できない。
- (77) 以上は六波羅蜜の各項目について述べたものである。ちなみに〈虚空蔵菩薩所問經〉(T. No. 397 (8) 13.96aff/ T. No. 404 13.616cff) でも同様に、六波羅蜜が虚空と等しいことが詳説されている。
- (78) *sems bskyed ma thag tu chos kyi 'khor lo sgyur ba*: \**Sahacittotpādadharmacakrapravartin*. 【識】「沙訶質兜波沈摩遮迦波栴鎖遮」「発意即転法輪菩薩」【護】「発意転法輪菩薩」【天】「平等心転法輪菩薩」 菩薩名としての \**Sahacittotpādadharmacakrapravartin* については、谷川 [1999] によって初期大乘經典から密教典籍にいたるまでの用例がまとめられている。同論文によれば、*Lalitavistara* や *Śūraṅgamasamādhi*, *Samādhirāja*, 〈華手經〉〈思益梵天所門經〉〈小品般若〉とその注釈の『大智度論』『理趣經』『金剛頂經』などにも用例が確認できる。
- また、本節の教説は \**Sūtrasamuccaya* にも引用される。拙著 [2012: 18] 参照。
- byang chub sems dpa' sems bskyed pa gang la / bdud sdig can gyis glags rnyed pa dang / de bzhin gshegs pa mi mnyes par 'gyur ba dang / lha rnam mi dga' bar 'gyur ba'i sems bskyed par mi bya'i / sems bskyed pa gang la / bdud sdig can gyis glags mi rnyed pa dang / de bzhin gshegs pa mnyes par 'gyur ba dang / lha rnam dga' ba dang / bdag gi dge ba'i rtsa ba'i phyags 'bri bar mi 'gyur ba'i sems bskyed par bya ste / de ltar zhugs pa de'i sems bskyed pa thams cad chos kyi 'khyor lo bskor ba yin no* (Pāsādika [1989: 94])
- (79) *sems bskyed pa*: \**cittopada* (LCTSD 2429)
- (80) *glags rnyed par 'gyur*: \**avatāram lapyaste* (Negi 561)
- (81) 本節のこれまでの部分について、蔵訳同様、悪い事例を先に説明して、後に良い事例を説くのは、漢訳諸本のうち、【護】のみである。【識】では蔵訳の後半にみら



- れる良い事例のみを説き、【天】では悪い事例と良い事例の順が逆になっている。
- (82) *de bzhin gshegs pa'i byang chub kyang ma skyes pa* 「如来のさとりも生じないこと」この一節は漢訳諸本には対応が見られず、蔵訳にのみ確認できる特有の表現である。
- (83) *tshig gi rab tu tha dad pa thams cad la spobs pa*: \*Sarvapada<sup>pr</sup>abhedapratibhāna. 【識】「薩怛波陀」「諸語自然無不入菩薩」【護】「弁諸句菩薩」【天】「了別一切句義大弁菩薩摩訶薩」この菩薩の名称については他例未詳。
- (84) 【識】では本節のこれより前の部分の記述を欠き、この部分以降に相当する記述のみがみられる。なお、【護】の対応箇所では「虚空」を欠き、「地・水・火・風」にのみ言及する。
- (85) *tshig gi rab tu tha dad pa shes pa thams cad*: 蔵訳では *thams cad* 「すべて」はその前の部分全体を修飾しているようにみえる。それでは意味がはっきりしないので、ここでは *tshig gi rab tu tha dad pa* 「語句の区別」のみを修飾しているとみなして訳出した。
- (86) *spobs pa'i phung po*: \*Pratibhānakūṭa (Cf. MVy 703) 【識】「波啻盤拘利」「樂不動菩薩」【護】「弁積菩薩」【天】「弁積菩薩」 \*Pratibhānakūṭa は V<sub>k</sub>N Ch. I §4 でも菩薩名として確認できる。また、本経第 II 章では文殊や化仏と問答を交わす菩薩として再び登場する。拙訳 [2017] 参照。
- (87) *blo gros rgya mtsho*: \*Sāgaramati. 【識】「沙竭末」「海意菩薩」【護】「海意菩薩」【天】「海意菩薩」 \*Sāgaramati は *Sāgaramatiparipṛcchā* 〈海慧所問経〉(T. Nos. 397 (5), 400; D No. 152) で活躍する菩薩として知られる。BHSD s.v 参照。
- (88) 【護】ではここで「一切声聞所不能及」という一文が挿入される。
- (89) 【識】のみ、この箇所では「譬如海受於衆流合為一味」という譬喩に言及する。この【識】にのみみられる表現に類似する譬喩が KP §40 にも見られる。
- tadyathāpi nāma kāśyapa nānādigvidikṣu mahānādīṣv āpskandho mahāsamudre praviṣṭaḥ sarvaṃ ekaraso bhavati yad uta lavaṇarasah* (KP p. 21)
- 「カーシャパよ、またたとえば、諸所方々の諸大河の大量の水も、大海にはいると、すべて塩辛いという一味のものとなる」(長尾・桜部訳 [2003: 44])
- 類似した譬喩は〈賢劫経〉(T. No. 425; D No. 94) および〈宝篋经〉(T. Nos. 461, 462; D No. 117), 〈除蓋障菩薩所問経〉(T. No. 489; D No. 231), 〈思益梵天所問経〉(T. Nos. 585, 586, 597; D No. 160) などにも確認できる。下田 [1993: 229] 参照。

表 1 〈阿闍世王經〉第 1 章前半部分 漢訳・藏訳諸本対照表

|     | T. 626        | T. 627       | T. 628        | A               | B       | Ba          | Bth         | D               | G     | Hi      | J       | L            | N               | P            | Ph          | S               | T            | U            |
|-----|---------------|--------------|---------------|-----------------|---------|-------------|-------------|-----------------|-------|---------|---------|--------------|-----------------|--------------|-------------|-----------------|--------------|--------------|
| §1  | 389a7         | 406b15       | 428b5         | —               | 276b6   | 76a3        | 50a7        | 211b3           | 1b2   | —       | 234b3   | 273b1        | 339a5           | 220a6        | 3a1         | 267a2           | 247b2        | 237b6        |
| §2  | 389a14        | 406b24       | 428b13        | —               | 277a3   | 76b1        | 50b2        | 211b6           | 1b6   | —       | 234b7   | 273b6        | 339b3           | 220b2        | 4b2         | 267a6           | 247b6        | 238a3        |
| §3  | 389a24        | 406c8        | 428b28        | —               | 277a8   | 76b6        | 50b6        | 212a3           | 2a2   | —       | 235a3   | 274a4        | 340a2           | 220b7        | 5b3         | 267b4           | 248a4        | 238a8        |
| §4  | 389b2         | 406c11       | 428c3         | —               | 277b2   | 77a2        | 50b8        | 212a5           | 2a4   | —       | 235a5   | 274a7        | 340a5           | 221a1        | 5b6         | 267b6           | 248a6        | 238b3        |
| §5  | 389b5         | 406c17       | 428c8         | —               | 277b4   | 77a5        | 51a2        | 212a6           | 2a7   | —       | 235a7   | 274b5        | 340b1           | 221a3        | 6a4         | 268a2           | 248b1        | 238b6        |
| §6  | 389b7         | 406c20       | 428c12        | —               | 277b6   | 77a6        | 51a3        | 212a7           | 2a8   | —       | 235a8   | 274b3        | 340b2           | 221a5        | 6a6         | 268a3           | 248b2        | 238b7        |
| §7  | 389b9         | 406c23       | 428c15        | —               | 277b7   | 77b1        | 51a5        | 212b1           | 2a10  | —       | 235b2   | 274b5        | 340b4           | 221a6        | 6b2         | 268a5           | 248b4        | 239a1        |
| §8  | 389b12        | 406c24       | 428c19        | —               | 278a1   | 77b2        | 51a6        | 212b2           | 2b1   | —       | 235b3   | 274b6        | 340b5           | 221a7        | 6b4         | 268a6           | 248b6        | 239a2        |
| §9  | 389b14        | 406c29       | 428c22        | —               | 278a3   | 77b5        | 51a8        | 212b4           | 2b4   | —       | 235b5   | 275a1        | 341a1           | 221b2        | 6b7         | 268b2           | 249a1        | 239a5        |
| §10 | 389b17        | 407a5        | 429c27        | —               | 278a6   | 78a1        | 51b1        | 212b6           | 2b7   | —       | 235b7   | 275a5        | 341a4           | 221b5        | 7a3         | 268b5           | 249a4        | 239a8        |
| §11 | 389b21        | 407a9        | 429a2         | —               | 278b1   | 78a4        | 51b3        | 213a1           | 2b10  | —       | 236a2   | 275a8        | 341a7           | 221b7        | 7a7         | 269a1           | 249a8        | 239b3        |
| §12 | 389b25        | 407a13       | 429a7         | —               | 278b5   | 78b1        | 51b6        | 213a4           | 3a3   | —       | 236a5   | 275b4        | 341b4           | 222a3        | 7b3         | 269a4           | 249b3        | 239b7        |
| §13 | 389c1         | 407a19       | 429a15        | —               | 278b8   | 78b4        | 51b9        | 213a6           | 3a6   | —       | 236a8   | 275b8        | 341b7           | 222a6        | 7b8         | 269a7           | 249b7        | 240a3        |
| §14 | 389c8         | 407a25       | 429a20        | —               | 279a3   | 79a1        | 52a2        | 213b1           | 3a9   | —       | 236b4   | 276a3        | 342a4           | 222b1        | 8a4         | 269b3           | 250a3        | 240a6        |
| §15 | 389c17        | 407b7        | 429b3         | —               | 279b3   | 79b2        | 52a9        | 213b7           | 3b6   | —       | 237a2   | 276b3        | 342b6           | 222b8        | 8b7         | 270a4           | 250b3        | 240b6        |
| §16 | 389c21        | 407b13       | 429b9         | —               | 279b6   | 79b5        | 52b2        | 214a2           | 3b9   | —       | 237a4   | 276b7        | 343a2           | 223a3        | 9a3         | 270a7           | 250b7        | 241a2        |
| §17 | 390a6         | 407c5        | 429c1         | —               | 280b3   | 80b5        | 53a4        | 214b5           | 4b1   | —       | 237b8   | 277b6        | 344a3           | 223b8        | 10a7        | 271a6           | 251b6        | 241b8        |
| §18 | 390a11        | 407c9        | 429c7         | —               | 280b6   | 81a2        | 53a7        | 214b7           | 4b5   | (77a1)  | 238a2   | 278a1        | 344a7           | 224a3        | 10b3        | 271a2           | 252a1        | 242a3        |
| §19 | 390a15        | 407c19       | 430c18        | —               | 281a4   | 81a7        | 53b4        | 215a4           | 5a2   | 77a6    | 238a7   | 278a8        | 344b6           | 224a8        | 11a3        | 272a1           | 252a7        | 242b2        |
| §20 | 390a19        | 408a1        | 430a2         | —               | 281b4   | 82a1        | 54a1        | 215b3           | 5a8   | 77b6    | 238b6   | 278b8        | 345b1           | 224b7        | 11b6        | 272b2           | 252b8        | 243a2        |
| §21 | 390a26-<br>b5 | 408a9-<br>19 | 430a10-<br>18 | (45a1)-<br>45a2 | 282a2-8 | 82a7-<br>b6 | 54a5-<br>b1 | 215b7-<br>216a4 | 5b3-9 | 78a4-b3 | 239a3-8 | 279a7-<br>b5 | 345b7-<br>346a6 | 225a5-<br>b2 | 12a5-<br>b4 | 272b7-<br>273a6 | 253a6-<br>b5 | 243a8-<br>b6 |